ジェフリ・チョーサー作
「トゥローイラスとクリセイデ」（その五）

宮田武志訳

巻の三

巻の三[1]の序詩はじまる。

ああ、幸の女神の輝きよ、君のささやかな輝きこそ、
美しき第三の天界を隈なく飾るのだ！
ああ、天つ日の想い人、ジョーヴの神の愛娘、
恋の喜びのつくり主、ああ、眉目麗しく慈しみ深き君よ、
君こそ常に優しき心求めて、そこに赴かんとし給うのだ！
ああ、まさしく幸と喜びのみなもとよ、
君が御力、君が御慈しみをたたえよう！

天国[2]で地獄で、地の上で海の上で、
君の御力は心に泌みる、わたしにはそう思われるのだ、
一〇 人も鳥も、獣も魚も、また、草も緑の樹も、
折にふれて、君が永久の御息吹[3]に打たれるのだから。

ジェフリ・チョーサー作「トゥローイラスとクリセイデ」（その五）

神は愛し給うのだ、恋を禁め給わないのだ。
この世に生きとし生けるもの、
恋を知らぬは木の端だ、恋なくしては生きて行けないのだ。
君こそ初めてジョーヴの神の御心を唆り給うたのだ、
ものみなそれが為に生きるという、その喜びの営みに。
君こそ、ジョーヴの神をして現[4]し人に想いを懸けしめ、
常に君が御心のままに、
ジョーヴの神に恋の喜びと歎きを与え、
二〇
現し世の恋を求めて姿さまざまに、ジョーヴの神を天降らしめ給い、
ジョーヴの神は君の御心のままなる現し人をとらえ給うたのだ。

君こそ猛き[5]マーズの神の御怒を鎮め給い、
御心のまま人の心を高め給うのだ。
その心を燃やさんと君の思い定め給うほどの人はみな、
すなわち恥を恐れ、悪しき行いを斥けるのだ。
君の御力によってこそ、人の心は優しく爽かに慈しみ深くなるのだ。
身分高かれまた低かれ、人それぞれの望みに従って持つなる喜び、
それは君の御力による賜物なのだ。

君は国を、また家を、和合せしめ給うのだ、

三〇 げに君こそまた、睦びのみなもとにおわすのだ。
君はものの隠れた性をあまさず知りつくし給うのだ、
この女かの男を慕い、この男かの女を愛するなる世のことわり、
この魚の魚梁に入って捕えられ、かの魚の免るるなることわり、
それを弁え知らないままに、
世のひとびとは君が神智に打ち驚くのだ。

君こそあまねく世のひとびとに掟を定め給うたのだ。
世の恋人たちのためしによって知られるのは、
なにびとにまれ、君に叛かんとする者は敗れるということだ。
とまれ、輝ける女神よ、君が御恵みもて、[6]
四〇 君に仕えるひとびとの文人なるわたしに教え給え、
そのひとびとにわが敬いの心を捧げんため、
君に仕えてこそ思い知らるるなる喜びのそこばくを語るべき術を。

げに君こそ、まずしきわが胸に情の露を注ぎ入れ給い、
わたしをして、君の芳しき御心を世に示さしめ給うのだ。
カライオピの女神よ、君が御声を今聞かしめ給え、[7]
今こそ望まるる君が御声。
君知り給わずや、今ただちにトゥローイラスの恋の喜びを語りはじめて、

ジェフリ・チョーサー作「トゥローイラスとクリセイデ」（その五）

ジェフリ・チョーサー作「トゥローイラスとクリセイデ」（その五）

ヴィーナスを誉めたたうべき術や如何にと、思い砕くなるわが苦しみを。
ああ、神よ、その喜びに導き給え、それを持たねばならぬ人を！

巻の三の序詩おわる。

巻の三はじまる。

五〇 この間中ずっと、トゥローイラスは身を伏せたまま、自らに言い聞かせているのでした、「そうだ、これこれのことを言うことにしよう。愛するあの人にこういう工合に苦しみを訴えよう。この言葉がいい、こういう顔つきをしよう。このことは決して忘れないようにしよう。」もくろみ通りに彼が振舞うことができますようにと神に祈りましょう。クリセイデの近づくのを耳にして、ああ、彼の心臓ははげしく打ちはじめ、息づかいはせわしくなりました。パンダラスは姪の衣服の端を取って導きながら近づいて来ましたが、六〇 カーテンの隙間から中を覗き込んで言うのでした。

「神の御恵みで世の中の病人がみんな治ってくれればいいのに。あなたのお見舞に伺ったのは誰だとお思いですか、あなたがおかくれになるようなことがあれば責任を負わねばならない、というような人ですよ。」

それを聞いてトゥローイラスは殆んど泣き出さんばかりの様子でしたが、いとも悲しそうに言いますには、

「ああ、ぼくの悲しい気持を知ってくれるのは神様だけだ！　そこにいるのは一体誰ですか、全然分らない。」

「殿下、パンダラスとわたくしでございます」とクリセイデが答えますと、「やあ、愛するあなたでしたか。七〇 ああ、跪いて敬意を表しようにも、ぼくは起き上ることが出来ないのです」と言いながらも、トゥローイラスはまっすぐに身を起しました。クリセイデはすぐさま両手をそっとトゥローイラスのからだの上に置いて言いました。

「まあ、そのようなこと、決してわたくしに遊ばさないで。一体どういう思召しからなのでしょう。殿下、わたくしがお訪ね致しましたのは、訳が二つございます。一つは、お礼の言葉を申し述べたい為でございます。いま一つは、引きつづいて殿下の御庇護がいただけますよう、

お願い申し上げたい為でございます。」

愛人が自分に庇護を求めるのを聞いて、トゥローイラスは生きた心地もなくなり、恥[八〇]ずかしさのあまりそれに対してひと言すら返すことができません、首が刎ねられるようなことがあってもとても駄目です。それどころか、ああ、突然真赤になってしまいました。読者の皆さん、クリセイデの同情を求めるために覚えているものと思っていた口上は、全く彼の頭から消え失せてしまったのです。クリセイデは利巧な女性ですから、この様子をすっかり見てとりました。トゥローイラスは無遠慮に振舞うというわけでもなく、片意地を張るというわけでもなく、また、あつかましくて言葉が過ぎるというわけでもないのですが、控え目だからといって、彼を好ましく思うクリセイデの気持に変りはなかったのです。恥じらう気持がやや薄れはじめた時漸くトゥローイラスが口にした言葉、それを今、古典の教えるままに、わ[九〇]たしの言葉の及ぶかぎりお伝えすることに致しましょう。

まさに恐怖のために打って変ったふるえ声、優にやさしく恥じらう様子、赤くなったり青くなったりする顔色、目を伏せ、つつましやかな態度で愛人クリセイデに向ってまず口を切って、「愛するあなた、同情して下さい、同情して下さい」と彼は二度重ねて言いました。それから暫く沈黙していましたが、漸く口が利けるようになって次のように言葉をつづけました。

「全[一〇〇]くのところ、ぼくはこれまで精一杯頭を働かせて完全にあなたのものたらんと努めて来ました。今後もこの哀れなぼくが死んで葬られるまで変らない積りです。ぼくはあなたに悩みを訴えるだけの勇気も能力もありませんが、だからといって、ぼくの苦しみ方がそれだけ少いってわけじゃ決してないんです。ああ、淑かなあなた、今は精々これだけしか申し上げられません。今申し上げたぼくの言葉があなたのお気にさわるようなことがあるなら、今すぐぼくの命でお気持を晴らし、お心を和げることにしましょう、ぼ[一一〇]くが死んであなたのお怒りを鎮めることが出来るのなら。ぼくの言いたいことはいくらか聞いていただいたのだから、今すぐ死んだって構いませんよ。」

このように男泣きに泣く様を眺めては、石のように冷たい心も憐みを覚えたことでしょう。パンダラスはびしょ濡れになりたがって居るのかと思われるほど涙にかきくれましたが、何度も何度も姪のからだを突っつきながら言うのでした。

「誠意があればこそ悲しいんだよ。後生だから事の結末をつけて貰いたいね。でなければ、今この場ですぐわれわれ二人を殺してから出かけて貰いたいんだ。」

「まあ、なんですって？、一体全体わたしにどんなことを言えっておっしゃるんでしょう？」[一二〇]

「まあ、なんですってじゃないよ、ぜひ殿下に御同情申し上げて、殿下をお見殺しにしないようにしてもらいたいって言うんだよ。」

「それじゃ、殿下にお願い申し上げたいのですけれど、殿下はどのような思召しで居らっしゃるのでしょう、それを殿下のお口から仰せになっていただきたいと存じますわ。どのようなお心持でいらっしゃるんだか、まだ充分承ったことがございませんもの。」

トゥローイラスが言いますには、

「ああ、愛するあなた、ぼくがどんな気持なのかっておっしゃるんですか？　ああ、きれいな爽かな気高い方、あなたの澄んだ眼で時々ぼくをやさしく眺めていただきたいんですよ。それから、このことに同意していただきたいのです、それは、あなたを真の愛人、一番大切なたよるべき人と考えて、かりそめにも悪い心を起さず、何時も誠実にあなたに仕えることが出来るようにってことなんです、ありたけの才を働かせ精一杯忠実に仕えることが出来るようにってことなんです。もしぼくがあなたの禁を犯すようなことがあれば、その罪に相応したあなたのお心のままの鞭を受けても、そうです、死の宣告を受けても、満足すべきだと思うんです。[一四〇]いつなん時でも結構です、ぼくにどんなことでも命じて下さい、こんな光栄はありません。ぼくはあなたの真実の、つつましやかな、誠実な、信頼すべき騎士として苦しみに堪え、あなたに仕えたいという希望を日々新たにして何時も変ることなく精励し、どんなに苦しくてもあなたの御希望を喜んで全面的に受け入れたいと思うのです。[一三〇]ああ愛するあなた、これがぼくの気持なんですよ。」

パンダラスが言いますには、

「これはまた、女として当然お断りすべきむずかしい御依頼だな。[一五〇]クリセイデ、生誕を司り給うジョーヴの神の祭祀にかけて断言してもいい、もしぼくが神様だったら、すぐにでもお前を死なせて上げることにするだろうね、だって、お前もよく承っただろうが、殿下のお望みになるのは外でもない、お前の名誉に関することで、ご覧のとおり殿下はそのことでまさに死に瀕していらっしゃる。しかもお前は殿下に仕えていただくことなど厭だって言うのだから。」

この言葉を聞いてクリセイデはじっくり考えながら極めて穏かに優しく叔父を打ち眺め、ひと言すら軽々には発しなかったのですが、漸く叔父に向って静かに言いました。

「わたくしの名誉さえ傷つけられないのなら、いま[一六〇]殿下の仰せになったような方法で殿下がわたくしにお仕え下さるってこと、わたくし、心からお受け致しますわ。これはぜひとも殿下にお願い申し上げたいことなのですけれど、誠実と礼節を御尊重下さった上で、わたくしが殿下に対して好意をお懐きしているようにわたくしに対して御好意をお懐きいただき、絶えずわたくしの名誉をお傷つけ遊ばさないように御如才なく慎重に御注意いただきたいと存じますわ。もし今後わたくしの力で殿下をお喜ばせ申し上げることが出来ますのならば、つくろいや衒いは致しません。さあ、元気をお出しにって、叔父様、もうこれ以上ぶつぶつおっしゃらないように。」

クリセイデは更に言葉をつづけるのでした。

「ただ、殿下にひと言御警告申し上げておきたいと存じます。なるほど[一七〇]殿下は王子様の御身分で居らっしゃるのですけれど、事恋愛に関するかぎり、わたくしに向って度を越した王子様振りを御発揮遊ばさないように。間違ったことを遊ばせば、わたくしだって忍耐し切れないで、殿下のお怒りを買うようなことをすることもございましょう。わたくしにお仕え下さる間は、殿下の御功罪に応じて御応待申し上げたいと存じます。かいつまんで申し上げますならば、愛するわたくしの騎士様、お心を楽しくお持ち遊ばして、もとのようにお元気におなり下さいまし。殿下のお苦しいお気持を楽しくして差し上げるように、わたくし真心をこめて力のかぎり努力致しますわ。[一八〇]もしわたくしに殿下をお喜ばせ申し上げる力がございますならば、殿下の御不幸の一つ一つを御幸福にお変え申し上げますわ。」

こう言ってクリセイデはトゥローイラスを両腕を抱いて接吻しました。

パンダラスは跪いて天を仰ぎ、両手を高く差し上げて言いました。

「命の絶えることのない不滅の神キューピットはこの出来事を讃美することだろう。ヴィーナスの女神よ、あなたは美しい調べを奏でることでしょう。このすばらしい出来事に対して[8]町の鐘が残らず、綱を引く人もいないのに鳴りひびくのが聞えるようだ。[一九〇]いや、今はこんなことを言うのをよそう、あの手紙を読み終えた方々がやがて帰って来られるだろうから。やあ、足音が聞えるぞ。

ところでお願いがあるんだが、ねえ、クリセイデ、いや、歩行可能におなりになればトゥローイラスさんも、御招待する節にはぼくの家にお越しいただきたいですね、お迎えする用意は充分しておきますから。ぼくの家でお二人ともゆっくり寛いでいただきたい。恋愛談にかけてはあなた方の内どちらが上手なのか、確かめてみようじょありませんか。」

こう言って笑いながら、彼は更につけ加えました。

「だって、ぼくの家ではお喋りの時間ならあなた方たっぷりお持ちになれるんですから。」[二〇〇]

「いつになればお招きに預かれるんだろう」とトゥローイラスが言いますと、「お起きになれば御招待致しますよ、今申し上げたとおり」とパンダラスは答えました。丁度その時ヘレンと、それにまたデイフォバスが階段を登りつめて来ました。すると、どうでしょう、トゥローイラスは呻き声を上げて兄と姉をたぶらかすのでした。パンダラスが言いますには、

「さあ、われわれはもうお暇しなくちゃ。クリセイデ、お三方にお別れの御挨拶を申し上げなさい、後でお話がおありになることだろうから。さあ、一緒に失礼しょうよ。」[二一〇]

よく作法を弁えたクリセイデのこととて、三人に行きとどいた別れの挨拶を述べましたが、三人も極めて鄭重に言葉を返しました。クリセイデの立ち去った後で彼等は、そのすぐれた容色、物腰、才智を口を極めてほめちぎり、そばで聞いていても気持がいい程その態度をほめそやすのでした。

クリセイデは帰路につかしめておいて、再びトゥローイラスに戻りましょう。彼はさきほどデイフォバスが庭園で読んだ手紙のことなどはさっさと忘れてしまって、ヘレンとデイフォバスから解放されたいものだと思うままに、ひと眠りしたい、話をした挙句なので休息したいと言うのでした。そこでヘレンは彼に接吻して早速暇を告げ、デイフォバスもまた立ち去り、ほかの人々も皆帰って行きました。その時パンダラスは大急ぎでまっしぐらにトゥローイラスの所に取って返し、[二二〇]トゥローイラスと並んで蒲団の上に横になって、晴々した顔つきで一晩中楽しく語り合いましたが、こうして一緒に居られることが二人には喜ばしく思われたのでした。人々が皆立ち去って二人だけになり、入口は何処もしっかり締められるやーくどくどしく言わないで手短かに申しましょうーパンダラスは早速がばと跳ね起きてベッドの側に腰をかけ、深刻な調子でトゥローイラスに次のように言いました。[二三〇]

「最愛の主君であり親しい兄弟であるトゥローイラスさん、これはあなただけが御存じのことなのですが、この一年間というもの、あなたが恋愛のために憔悴してらっしゃるのをお見受けして、ぼくはずいぶん心を痛めましたよ。あなたのお苦しみは段々はげしくなって行きましたね。そこでぼくはそれ以来全力を傾け、また、ありとあらゆる智恵を絞って、あなたの暗いお気持を明るくして差し上げようと散々骨を折りま[二四〇]

したよ。やっと御覧のとおりの段階にまで漕ぎつけました。ぼくの努力の甲斐があって、今やあなたの前途は洋々たりです。何も自慢するわけじゃありません。どうしてこんなことを言うんだかお分りでしょうか？　申し上げるのもお恥ずかしい次第なんですが、あなたの為にぼくはゲームを始めたんですよ。血を分けた兄弟の為にだって、人の為に二度とこんなことをやろうとは思いませんね。つまりぼくはあなたの為に、本気とも遊びともつかず、女性を男性に結びつける仲人になってしまったのですよ。ぼくの口から申し上げなくても、ぼくの言わんとするところは充分お分り下さることと思います。あなたの為にぼくは清浄無垢な姪を説いてあなたの御高潔に全幅の信頼を寄せしめたのです。その結果、今や万事正にあなたの御意のままなりと言う次第です。全智の神を証人に立てて申しましょう、ぼくはこのような段取りを自ら得るところあらんとしてしたのでは決してありません。お察ししたところあなたが正に死に瀕してらっしゃるので、その御心痛を和げて差し上げたいと考えたまでなんですよ。」

それは兎も角として、トゥローイラスさん、これはあなたの御義務なんですが、賢明なあなたのことです、後生ですから、姪が非難を受けないように、そして、絶えず名声を維持するように御配慮願いたいのです。あなたもよく御存じのとおり、この町の人々の間では姪の名は今、いわば神聖視されているんです。これは断言して憚らないんですが、クリセイデが道に外れたことをしたというようなことを耳にした人は、今までのところ一人だっていないのです。今度のことを惹き起したのはぼくなんですから、クリセイデがぼくの愛する姪であり、ぼくはクリセイデの叔父であると同時に欺瞞者なんだと考えると、とても悲しくなるんですよ。あなたをお喜ばせして、全くあなたのものになるってこと、そんな考をぼくがたくらんで姪に吹き込んだのだということが知れればどうでしょう、世を挙げてごうごうたる非難の声を浴せかけ、ぼくは今度のことで前代未聞の不信行為をしたってことにされるでしょうし、姪はすっかり名声を落すことでしょう、また、殿下だって、何等得るところなしということにおなりになるでしょうよ。ですから、更に一歩策を進める前に、もう一度くれぐれあなたにお願い申し上げたいのですが、今度のことについては、われわれの間でかたく秘密を守ることに致しましょう、つまり、あなたがわれわれ二人をお裏切りにならないよう、ぜひお願い申し上げたいのです。秘密を秘密をって口をすっぱくしてお願い致しますが、何しろ事は重大なんですから、決して御立腹なさらないように、もっともなお願いだということは、あなたも充分御承知のことでしょうから。

よくお考え下さい、自慢らしく言いふらすことから、これまでどんな悲劇が起ったかってことは、書物を見れば分ることですし、昔のみなら

ジェフリ・チョーサー作「トゥローイラスとクリセイデ」（その五）

ず今でも、この自慢という困った行為から世間では不幸が毎日起っているんです。だからこそ昔の賢人たちは、沈黙は徳のはじめなりっていうような格言を残してわれわれ青年を教えているんですよ。今は多言を弄することは慎しみたいと思いますので一々申しませんが、思慮のない男性の不誠実な吹聴によって女性が破滅を招いた昔の物語なら、殆んど無数にお聞かせすることが出来ますよ。饒舌[三〇〇]っていう悪徳を戒めた格言はあなた御自身沢山御存じのことでしょう、もっとも、饒舌も嘘ばかりじゃなくて、半分くらいは事実も含まれているものですがね。男性がひと言吹いたばかりに、無数のきれいな奥さんたちに、ああ、はかない人生だわって言わせたことは、これまで数え切れないくらいあったことでしょうし、幾人もの娘さんたちの悲しみを新しく掻き立てたことも度々あったことでしょう。大抵の場合、よく検討してみれば、男性たちの吹くことは全部嘘の皮なんで、自慢家なんてものは元来例外なく信用すべからざる代物ですね。

自慢家と嘘言者は一なりですよ、例えば[三一〇]一人の女性がぼくに恋を許してくれた上で、ほかの誰も恋人にしないって言ってくれたと仮定しますよ、ぼくがその女性に秘密は厳守しますって言っておきながら、よそに行って二、三の人に一件を喋ったとすればどうでしょう、たしかにぼくは少くとも自慢家であり、また、約束を破ったのだから嘘言者だってことになります。それからまた、こういうこともお考え下さい、この種の人たちをどう呼んでいいんだか分らないのですが、つまりですね、誓いのちの字もしてくれたことはないし、[三一〇]またこれっぽちも自分を知らない女性に関して堂々とその名を挙げて自慢するっていったような種類の人たち、こういう人たちが万一非難されないとすればどうでしょう、それこそ世の女性たちが男性御し難しってわけで慓え上ったって何の不思議もありませんよ。ぼくがこんなことを言うのは、殿下をはじめとして賢明な世の男性たちを信用しないからでは決してありません。世の中には底抜けの馬鹿がうんと居て、悪意からってこともありますが、それにも劣らずまた愚行のために、今やしばしば世に害毒を流しているからなんですよ。世の女性たるもの、胸に手を当ててよく考えてみればですね、実際のところ、自慢の悪徳なんてものは賢明な男性にはありっこないことなんで、全く心配無用ですよ、彼等は馬鹿[9]者の流す害毒を見せつけられて充分自戒していますからね。

[三二〇]それは兎も角として、話の要点に移りましょう。親愛な兄弟ともいうべき殿下、ぼくの申し上げたことは残らずお心に銘じてお忘れないように、そうして、秘密をお守り下さると同時に元気をお出し下さい、あなたが御幸福におなりになった暁には、きっとぼくの誠実をお認め下さることでしょうから。断言致しますが、あなたの為に必らず御満足のゆくように事を運んで御覧に入れますよ、まさにあなたの御計画どおりにな

るように致しますからね。殿下の誠実なお心持は実際よく分ります、それだからこそぼくは敢えて今度の事を全面的にお引受けするんです。あなたの愛人があなたに何をお許ししたかってこと、そのこともあなたはよく御存じの筈です。[三四〇]クリセイデ女王の勅許状起草の日定まれりですよ。じゃあ、お寝み下さい、ぼくはもう目がもたない。今あなたは幸福におなりになったんですから、今度はぼくの為に祈っていただかなくちゃ、やがて神が死なり喜びなりをぼくに与え給うようにってね。」

パンダラスの約束の趣旨を聞いてその時トゥローイラスがしみじみ味った欣喜雀躍の情、その歓喜の半ばをすら誰が筆にすることが出来るでしょうか。心も消え入るばかりだった過ぎし日の哀愁、今やそれは喜びのために消え去り溶け去って、あのすさまじかった青息吐息は忽ちその姿を消してしまい、[三五〇]溜息など彼はけろりと忘れてしまったのでした。冬の間には枯れ凋んでいた森や生垣の木々が、元気のいい人々がみな遊楽にうつつを抜かす春五月ともなれば、再び緑の衣をつけるのとまさに全く同じ状態だと申しましょうか、トゥローイラスの心は今や忽ち喜びに満ち溢れて、彼ほど幸福感に浸っている人はトゥロイの町中に一人も居なかったことでしょう。

彼は真剣な、そして見るからに友情の籠った面持でパンダラスを見上げながら言いました。

[三六〇]「ねえ、君、君も覚えてるだろうが、御存じのとおり、この四月にはぼくは死と紙一重と言っていいくらい悲観のどん底に沈んだんだ。そして君はぼくの憂鬱の原因をぼくから聞きただそうとして全く骨身を削ってくれたよ。御存じのようにぼくは最も信頼する君にすら長い間それを洩らすまいとした。ところが今にして思えば、君にその原因を打ち明けることを危険視するには当らなかったのだ。どうだね、よければ言ってくれないか、君にさえあれほど知られるのを嫌ったぼくに、[三七〇]この一件を君以外の者に洩らす勇気があるだろうか、いまぼくたちの話を聞く者もいないのに、がたがた慄えるこのぼくにさ。

それはそれとして、御心のままにこの世を支配し給う神にかけて君に誓おう、—もしぼくの言うことが嘘なら、また、もしぼくが早晩秘密を洩らす気になるなら、敢えて洩らすなら、洩らすことができるなら、死ぬべきぼく、このぼくの命が不朽のものであるにせよ、アキリーズがぼくの心臓を槍で引き裂いてくれればいいと思うよ、神が太陽の下に造り給うたすべての財宝に代えても—、秘密を洩らすよりはむしろ、残忍なアガメムノン王の捕虜として、[三八〇]枷をはめられて獄に投ぜられ、虫けらと一緒にあわれな不潔な状態で死に果てたいとぼくは思うのだ。君が聞きたいと言うのなら、明日にでもこの町中の神社という神社で、よろずの神にかけてこのことを誓うことにするよ。これは肝に銘じているんだ

が、君はこれまで実によくぼくの為に尽くしてくれたね、これ以上君に尽くしてもらうことは罰当りだよ、いまぼくが君の為に日に千回死んでみせられるとしてもね。[三九〇]今ぼくに言えるのは、君がどこへ行くにしてもまさに君の奴隷として死ぬまで永久に君に仕えたいということだけだ。

ところで、衷心から君にお願いしたいんだが、今お話しするような馬鹿げた思い違いをぼくがしてるんじゃないかってこと、そんな風には絶対に考えてもらいたくないんだよ、つまりだね、君の口振りでは、君が友情からぼくの為に尽くしてくれることを、ぼくは情婦の周旋行為くらいに考えてるってことになるらしいんだ。無智なりとはいえ、ぼくは気違いじゃない、全くのところ、君の考は実にとんでもないことだ。[四〇〇]金や富に目が眩んでそんな用事の走り使いをする奴のことを何て呼ぼうが君の御随意さ、しかしだね、君の行為は親切、同情、友情、誠実って呼ぶことにしょうよ。ぼくの知るところに依ればだね、一見相似た事柄の間にも差異が存するんだ、周知の事理なんだから、これくらいの区別はしようじゃないか。君がぼくの為に尽くしてくれる親切を、恥ずべき行為だの、笑うべき行為だのって考えたり推量したりするぼくじゃないよ、そのことを知ってもらうためには、その保証としてこういうことにしょう、つまり、ぼくには美人の妹のポリクシナ、[四一〇]カサンドゥラ、ヘレンなどがあり、それに、その友達たちの誰彼も知ってるわけなんだが、よし凄い美人だとしてもこれらの連中のうちの誰を愛人として持ちたいんだかぼくに教えてくれ給え、そして、その後のことは、ぼくに任せてもらうことにしょう。

それは免も角として、君はぼくの命を教うために報酬の何のってことは度外視して尽くしてくれたんだから、後生だ、この大きな仕事を徹底的にやり通してくれ給え、今こそ最大のピンチなんだから。ぼくは事の大小を問わず、何等遅疑することとなく君の言うことに絶えず従ってゆく積りだ。[四二〇]じゃあ、お寝みなさい、ねえ、寝ることにしょうよ。」

かくて互に相手の言葉に満足し合いましたが、これ以上和かな空気を醸し出すことは絶対にできますまい。翌朝、身支度を整えたのち、二人はそれぞれ用務に取りかかりました。トゥローイラスの心は希望と歓喜の激情で焔のように燃え立ちましたが、慎重な自制を忘れることなく、健気にも無分別な行為を慎み、手放しの喜色を押えましたので、[四三〇]全くのところ誰一人として、今度のことについての彼の心持をその言動から察知することは出来なかったことでしょう。誰の目にも杳(よう)として雲の如しとでも申しましょうか、彼はいとも巧みにしらばくれることが出来たのでした。

今お話ししている期間中の彼の生活振りを申し上げましょう。昼は全力を挙げてマーズの軍神に雄々しく仕え、騎士として奮戦しましたが、

長い夜には大抵横[四四〇]たわったまま、愛人の感謝を受ける為にはどのように仕えれば一番いいだろうかと考えつづけるのでした。なるほど彼はいとも安らかに横たわって居るようではありましたけれども、その心に一抹の不安はなかったでしょうか、枕しつつも、しばしば寝返りを打ちはしなかったでしょうか、何か物足りないようには感じなかったでしょうか、このようなことがなかったとは保証致し兼ねます。このような場合、トゥローイラスと同じく恐らく誰でも、常に必ずしも満足し切れるものではありますまい、そう考えてまず間違いないでしょう。

ともあれ、話の要点に進みましょう。物語の伝えるところに依りますと、その[四五〇]間にもたしかにトゥローイラスは時々愛人に会っていましたし、愛人もまた、勇気を出すことが出来て気の向く時には、彼と言葉を交したのです。二人は最上の智恵を絞って相談し、この窮境に於てあらん限りの勇を鼓して事を進めて行く方策を極めて慎重にしめし合せました。二人が語り合うといっても極めて短時間で、しかも常に警戒怠りなく、誰かが自分たち二人について推量したり喋ったりしはしないか、自分たちの話に聴き耳を立てはしないかと、おっかなびっくりの有様でした。そういう工合だったので、たっぷりしまいまで話り合うことができるようキューピッドが恵みを垂れてくれれば、これほど[四六〇]有難いことはまたとなかったことでしょう。もっとも、二人の言動はこのように限られてはいたものの、頭のいいトゥローイラスの神経は絶えずあまねく行き届いて、口に出して言わなくても自分の心をそれと察してくれるようにクリセイデには思われましたので、こうして下さい、こうなさらないようにと、一々言う必要はなかったくらいです。このような次第ですから、恋の芽生えはおそかったのですけれども、今や自分に向ってその全歓喜の門戸を開いてくれたようにクリセイデは思ったのでした。

事の[四七〇]経過を簡単に申しましょう。トゥローイラスはその言動頗る宜しきに適いましたので全く愛人の気に入り、クリセイデはよくまあこの方にめぐり合せたものだと、神に感謝すること二万回にして漸く止むといった有様でした。トゥローイラスの愛の奉仕振りたるや実に堂に入ったもので、これ以上の奉仕は誰一人として企て得なかったことでしょう、といいますのは、クリセイデの見るところでは、彼は何事にも極めて慎重であり、よく秘密を守ってくれ、恭順そのものでありまして、自分にとって彼が鋼鉄の壁であるかのように感じられ、あらゆる[四八〇]不快なものから守ってくれる楯のように思われたからです。そこで、このように聰明なトゥローイラスの当を得た支配の下に立つことにクリセイデは懸念を感じなくなりました、というのは、まさにさもあるべき限度内において、という意味なのですが。一方パンダラスは恋の焔を燃やしつづけておかなければと、常にてきぱきと、まめまめしく立ち働きましたが、彼の望むところは専ら友を安心させることにあったのです。彼は絶えず事を

ぐんぐん運びましたが、使者として二人の間を往来したり、トゥローイラスの留守の時には手紙を届けたりしました。友達が困っている時に、彼ほど[四九〇]よく尽くし得る者はたしかに一人もいなかったことでしょう。

さて、恐らく読者のある方は、この間におけるトゥローイラスの愛人に対するあらゆる言葉、言伝（ことづて）、表情、態度をわたしが詳しく述べることを御期待になることでしょうが、凡そこのような窮境にある人のすべての言葉、あらゆる様子を残らず聞いていただくこと、一々述べることは、冗長なことだと思われます。実際のところ、わたしはそのような詳しい記述はどの物語にもまだ見受けませんし、読者のどなたにしてもそうだろうと思います。詳しく[五〇〇]述べたいと望んだところで、たしかに出来ない相談です、と言いますのは、二人の間に交された手紙があって、この物語の原作者に依れば、その手紙はこの巻のなかば近くの長さにも及ぶそうですが、原作者はその内容を述べようとはしなかったので、その一行すらわたしにはお伝えすることが出来ないからです。[10]

それは兎も角として、要点に戻って話をつづけましょう。トゥローイラスとクリセイデの二人は、前にも申しましたとおり、よく心が合って静かに甘美な日を重ね、意に満たないことと言えば、しばしばランデヴーができないということ、心ゆくばかり語り合う暇がないということ、[五一〇]ただそれだけでありましたが、たまたま、のちほどお話ししますように、パンダラスはたしかに二人を招待する機会を得たようです。彼は、これまた後ほど申し上げるような目的で、美しい姪とトゥローイラスを一晩一緒に自分の家に招いて、二人の恋愛についての重要な問題をゆっくり時間をかけて充分解決したいものだと、かねがね努力して来たのでした、といいますのは、彼はこの意図に役立つあらゆる事柄を極めて慎重に予め思いめぐらしてそれを実行に移し、如何なる犠牲を払い如何なる労力をかけても断念しなかったのです。[五二〇]二人が来る気持にさえなれば、万事二人の期待に背かないようにしょう、そう思っていました。自分の家で苟くも人に見つかるようなことはあり得ないだろうと彼は信じていたのでした。風向きから言って、鵲男（かささぎ）や邪魔立て男を心配する必要はたしかに無かったのです。世間の人は誰彼となく一人も今度のことを知らず、今や万事好都合です、材木は組み立てられるばかりになっています。[五三〇]クリセイデは何時訪れることになるでしょうか、今われわれが知りたいのはこのことだけなのです。[11]

この計画の全貌を充分知っていて、常にその実現を待ち設けていたトゥローイラスは、この計画に基いて慎重に準備を整え、口実を設けて用意したのでした、その口実というのは、この恋の献身のさなかに、昼にせよ夜にせよ、万一自分の姿が見えなくなるようなことがあれば、それ

は神に祈願をかける為に出かけているのだということです。アポロの神託を受ける為に自分はかくかくの神社でただ一人夜明かししなければならないのだ、それは、月桂樹が揺れ動き、それにつづいてその月桂樹からアポロの御声がかかって、ギリシャ軍がいつ退散するかについて神託があるのだが、まずその神聖な月桂樹の揺れ動くのに目をとめるためなのだ、というのでした。その様なわけですから、まあ、決して彼に邪魔立てしないことにして、アポロが窮地にある彼を助け給うよう祈ることに致しましょう。[五四〇]

今や打つべき手は打たれつくしたと言っていいでしょう。パンダラスは立ち上りました。手短かにお話し致しましょう、丁度、一晩二晩闇夜がつづくという月の変り目の直後で、しかも今にも雨の落ちそうな雲行きでしたが、パンダラスはある朝まっすぐに姪の邸に向いました、彼の意図の何たるかは読者の皆さんの先刻御承知のところです。姪の邸に着くや、例のとおり冗談や自嘲を始めましたが、それが済むと、やたらに誓言を繰り返しながら姪に申しました、それは、決してぼくを避けてはならない、息を切らしてお前の後を追っかけ廻らせるようなことはもう真っ平だ、今夜お前はぼくの家で晩餐を共にするために快く来なければならないのだ、というようなことでした。それを聞いてクリセイデが笑いながらしきりに言訳して、「雨が降ってるじゃありませんか。この雨じゃとてもお伺いできないわ」と言いますと、叔父は、「よした、よした、駄目だよ、思案投首は、ぜひ来て貰わなくちゃ。すぐ来るんだよ」と言うのでした。[五五〇] [五六〇]

やっと二人の間で話がまとまりました、パンダラスが姪の耳許で声を落して、それが嫌ならもう二度とはお前の所に来ないよ、と極めつけはしたのですが。そのすぐ後でクリセイデが声をひそめて、トゥローイラスも来るのかどうか尋ねますと、パンダラスは、彼の姿が町に見えないから来ないだろうと断言してのち、更に言いました。[五七〇]

「お前、トゥローイラスさんがここに見えるからって、何もこわがることはないじゃないか、トゥローイラスさんがうちに来てらっしゃるところが人に見付かるなんて、そんなへまなことをするくらいなら、死んだ方が千倍もましだよ。」

トゥローイラスの姿が町に見えないとパンダラスが言った時、クリセイデはどのような気持がしたでしょうか、叔父の言うことを果して信じたでしょうか、物語[12]の原作者はそのことについてはっきり述べようとはしていません。原作に見えるのはただ、パンダラスが頭を下げて頼むのでクリセイデはそれ以上ぐずぐずしないで、叔父と一緒に行くことに同意し、当然のことながら姪として叔父の言葉に従ったということだけなのです。[五八〇]

叔父と一緒に行くことを恐れはしなかったのですが、クリセイデは叔父にくれぐれ頼みました、それは、ありもしないことを想像するおめでたい人々のさがない口を警戒していただきたい、招待する人の種類にも充分気をつけていただきたいということでした。「叔父様、万事よろしくお願い致しますわ、お好きなようになさって下さいましな、だって、叔父様を一等御信頼してるんですもの、わたし」とクリセイデが言いますと、パンダラスは大丈夫だとばかり、切株にかけ、石にかけ、天なる神々[五九〇]にかけて誓い、もしへまをやれば、全身を抛って、タンタラスのように地獄の底深くプルートー王と一緒に住まってもいい、と言うのでした。このようなことを長々しく申し上げる必要もありますまい。万事好都合と見るや、パンダラスは立ち上って別れを告げました。夕刻になってクリセイデは、数人の従者たち、美しい姪のアンティゴニー、九人乃至十人の侍女たち、これらの人々を伴って晩餐に赴きました。さて、喜んだのは誰でしょう、皆さんの御推察のとおりそれはまさにトゥローイラスです。彼は真夜中[六〇〇]から小部屋の中に塒の鳥よろしく閉じ籠っていたのですが、佇んだままそこの小さい窓越しに一行を垣間見ることができたのです、パンダラス以外には誰一人知る者はありません。

ともあれ、要点に進みましょう。クリセイデが訪れるや、叔父はすぐさま大喜びで如何にも親しげに姪を両腕に抱きしめました。そののち時刻が来ましたので一同残らず極めて静かに晩餐の席につきました。全くのところ、何一つ不足のない御馳走振りです。晩餐後[六一〇]一同立ち上りましたが、全く打ち寛いで、生々とした楽しい気分でした。すばらしい思い付きで女性を喜ばせることの出来た男性、女性を笑わせることの出来た男性は大満足です。歌を歌う男性あり、楽器を鳴らす女性あり、ワダ[13]の物語を語る男性ありといった工合でした。しかし物事にはきりがありません、クリセイデは別れを告げ、どうしても立ち去らなければと思いました。

しかし、ああ、運命の女神よ、運命の執行者よ、おお、九天の霊妙なる力よ、現身[六二〇]にはその力のみなもとさだかならねど、まこと、あなたこそ、現世に於いてわれわれの保護者なのだ。

わたしは今どうしてこのようなことを言うのでしょうか、クリセイデはそそくさと帰ろうとしたのですが、有無を言わさず神意が下って、クリセイデは留らなければならなかったからです、といいますのは、青白い角をもった三日月と土星と木星とが巨蟹宮で相会したため、沛然と雨が降り出して来て、濛々と煙る雨にその場の女性たちはみな肝を冷やしたのです。その様子を見てパンダラスは笑いながら言いました。

「さあ、[六三〇]御婦人のお出かけになる絶好の時ですよ。だが、クリセイデ、果してお気に入るかどうか知らないが、お願いだ、今夜は一晩中ぼく

と一緒に居てもらいたいね、そうして呉れればこんな嬉しいことはないんだがな、だって、本当にここはお前のうちみたいなものなんだからね。全くのところこれは真面目な話なんだが、ぼくが恥を掻くことになるよ、今お前に帰られたんでは。」

極めて思慮の深いクリセイデは叔父の懇請に心を留めました。それに、この雨で何もかもずぶ濡れという有様でしたから、「ぶつぶつ言って結局居つづけることにするより、愛想よく喜んで同意しながら腰を据えて叔父様に感謝していただく方が得だわ、出かけたところで困るだけだろうから」と考え、叔父に言いました、

「承知致しました、叔父様。叔父様のお望みなんですもの、そうするのが当然ですわ。こちらに泊めていただきますわ、喜んで。冗談に言ってみただけなのよ、帰るってのは。」

叔父は答えました、

「やあ、ありがとう、クリセイデ。今度は冗談でもなんでも構やしない、こんな嬉しいことはないよ、とにかく泊る気になってくれて。」

こういう工合に万事都合よく行き、改めて歓楽と賑いがすぐまた始まりました。しかしパンダラスは、もし手際よく行くものなら、クリセイデを急がせて寝かせたいものだと思いました。そこで言いますには、

「やあ、これはまたどしゃ降りだ。こんな天気の時にはすっこんで寝るにかぎるよ。悪いことは言わない、早速寝ることにしょうよ。クリセイデ、どこで寝てもらうことにするかな。われわれがあまり離ればなれに寝るのも困るし、実を言えば、雨や雷の音がお前の耳についても困るしね。そうだ、向うのぼくの小さな部屋がいい。ぼくはホールを仕切った外側で一人寝て、お前の侍女たちみんなの為に見張り役を仰せつかることにしょう。侍女たちにはホールを仕切ったこの内側でぐっすり寝てもらうことにするか。お前には今言った部屋で寝てもらうことにして、もし今夜よく眠れたらこれから度々来るがいい。空模様など気にすることはないよ。いま寝酒が来る筈だ、そして、寝たくなればいつでもすぐ寝ることにしょうよ、それが一番いいさ。」

これ以上くどくど申しますまい。その後すぐ寝酒が飲み乾されて、ホールを仕切るカーテンがすぐさま引かれ、人々は皆もうそこでは用事もなくなったので、ホールから引きさがって行きました。雨は相変らず烈しく降りしきり、その上風の音も物凄く、お互の言葉も聞き取れないくらいでした。そこで叔父のパンダラスは、叔父として当然のことながら、侍女たちの内でもじきじきの女たちと一緒にいそいそと姪をベッドの

そばまで案内して行き、それじゃあといとも鄭重に頭を下げて言いました。

「この部屋のドアーのすぐ向い側に侍女たちがみんな寝てるんだから、誰でも呼びたい人を呼べばいいよ。」

クリセイデがその小部屋で寝に就き、侍女たちも皆順序よく引き下がってさきに述べた部屋で就寝したのちは、六九〇もう誰も飛び廻ったり、どたばた歩き廻ることを許されず、何処かにまだ起きている者が居ればお目玉を頂戴して就寝を命じられました。就寝した人たちは眠らせておくことにしましょう。

ところで、恋愛術の隅々まで余すところなく心得ているパンダラスは、万事思う壺にはまったのを見すまして、どれ、仕事に取り掛ろうかと考えました。そこで、例の小部屋の戸の掛け金をそっと外しましたが、もはや邪魔も入らないこととて、七〇〇トゥローイラスの脇に静かに腰を下して一手短かに要点に進みましょう—仕事振りの一部始終をトゥローイラスに話してのち言いました。

「すぐ御用意下さい、すばらしい幸福が得られるのですから。」

トゥローイラスが言いますには、

「ああ、幸福の女神ヴィーナスよ、御恵みをお授け下さい、こんなに苦しいことは今までになかったのですから、また、この半分も恐しい目に遭ったことはないのですから。」

パンダラスは言いました。

「絶対に御心配には及びません、いまに御希望どおりになるのですから。七一〇全くのところ、のるかそるかの勝負ですよ、今夜は。」

トゥローイラスが言いますには、

「幸神の女神ヴィーナスよ、今夜こそ是非ともわたくしに元気をお授け下さい、わたくしは今のあなたにお仕えし、今後も死ぬまでますます敬虔にお仕えする積りなのです。おお、喜びに満ち溢れたヴィーナスよ、[14]わたくしの生れた時に火星或は土星の相が凶(わる)かったとすれば、または、[15]あなたの光が失せ、力が衰えていたとすれば、御慈悲で以てその害毒を払いのけて下さるよう、あなたの父君にお願いになって下さい、わたくしの心が再び楽しくなりますよう、父君にお願いになって下さい、[16]七二〇あなたが森の茂みで愛し給うた人、猪に殺されたあのアドーニスの愛にかけて、わたくしの為にこのようにお願いになって下さい。おお、ジョーヴよ、お助け下さい、牡牛の姿に身を変えてあなたが連れ去り給うた

美しいユーロパ[17]の愛にかけて。おお、血染めの外套を纏ったマーズよ、シプリス[18]の愛にかけてわたくしを妨げ給わないように。おお、フィーバスよ、ダフニ[19]が樹皮の下に身を隠し恐怖のために月桂樹に身を変えた時のことを思い出して下さい、そうしてそのダフニの愛にかけて、いま窮地にあるわたくしをお助け下さい。マーキュリーよ、七三〇その人ゆえにパラスがアグラウロースに対して怒ったというあのハーシー[20]の愛にかけて今わたくしをお助け不さい。ダイアナよ、わたくしの今の試みがあなたのお気持をそこないませんように。おお、わたくしの産衣（うぶぎ）がつくられる前にわたくしの運命を織り給うた運命[21]の女神たちよ、今はじめられたわたくしの仕事に御力をお与え下さい。」

パンダラスは言いました。

「これはまたお気の毒なこと、鼠のようにびくびくなさるじゃありませんか。あの女が噛みつくとでもお思いなんですか。さあ、この毛皮の外套をシャツの上にお召しになって、ぼくについて来て下さい、叱られ役はぼくが引受けますから。七四〇いや、ちょっとお待ち下さい、ぼくが一足先に立って行くことにしましょう。」

こう言いながらパンダラスは落し戸を明け、トゥローイラスの衣服の端を取って導き入れました。烈しい風がすさまじく唸りを生じ、聞えるのはただ風の音ばかりです。ドアーの外の部屋で寝ている連中は残らず白河夜船です。パンダラスは緊張した面持でそれらの人たちの寝ている部屋のドアーにすばやく近づいてそっと締め、七五〇再び忍び足で元の所に戻りますと、姪は目を覚まして、「どなたですか」と聞き咎（とが）めました。パンダラスは、「クリセイデ、ぼくだよ。怪しむことも恐れるくともないよ」と言いながら近づいて行って姪の耳許で囁きました、

「後生だ、静かにしてくれ、人が目を覚まして二人の話するのを聞くと厄介だから。」

「まあ、一体どこからこの部屋におはいりになりましたの、誰にも気づかれないで。」

「この秘密の落し戸からだよ。」

七六〇「誰か呼びますよ！」

「いや、とんでもない、そんな馬鹿な真似をされちゃ困るよ。人が想像するじゃないか、今まで考えもしなかったことをさ。寝てる犬を起す手はないよ、推量の種を蒔くのは愚だ。お前の侍女たちはみんな、床の下を掘られたって知らぬ仏のおねんねさ、全くのところ。お天道さまが輝くまで起きっこないよ。ぼくの話をすっかり聞いてもらったら、七七〇来た時と同じ忍び足、さっさと出て行くさ。ねえ、クリセイデ、これはお前

にも充分分ってもらわなければ困ることだし、どんな女性だってみんな同意してくれることなんだがね、恋の相手の男性に期待を懐かせてだね、彼氏のことを、愛するあなただの何だのって呼んでおきながらさ、豈計らんやまんまと一杯食わせるなんてことをするとすればだ、つまり初めから別の愛人を持っていたっていうようなことなんだがね、まさに自己に対して破廉恥行為、他に対して欺瞞行為を犯すことになるよ。ぼくがこんなことをお前に言うのはなぜだろう？まさに当代随一の騎士たるトゥローイラスさんにお前が全面的に恋をお許ししたってこと、加うるにだ、貞節をお誓いしたってことは誰よりもお前自身が百も承知のところだ。だから、お前がトゥローイラスさんをお裏切りするなんてことは生涯あるまいと思うね、それだけの理由があの方の側にあれば別だが。

七八〇

ところで事情はこうなんだ、ぼくがお前のそばを離れてからなんだが、ざっくばらんに言えばだね、トゥローイラスさんがこの雨の中をこっそり樋伝いにぼくの部屋に忍び込んで来られたんだ、勿論ぼく以外には誰一人知らないさ、これはたしかなことだ、トゥロイのプライアム王に尽くすべき忠誠にかけて誓うよ。ところがだ、はいって来られた時のお顔色たるや実に痛々しいって言おうか、哀れって言おうか、あの御様子じゃ、今のところはまだ全く御狂気とまでは行かないにしてもだ、いつなん時突然御発狂になるか分ったものじゃないよ、奇蹟でも起らない限りね。その訳はこうだ、トゥローイラスさんは友達の口から聞いたっておっしゃるんだが、お前が別の男性を愛してるらしいってことなんだ、ホラステスって言ったっけ。悲憤やる方なしって訳さ、あの分じゃ、今夜という今夜お命が危いかも知れないよ。」

八〇〇

簽から棒の話を聞いてクリセイデは忽ち竦然として肝を冷やしました。溜息をついて悲しげに答えますには、

「まあ、わたしがお誓いを破るなんてこと、誰の蔭口にしろ、そんなことを軽々しくお信じになる筈は絶対にないと思っていましたのに、あの方に限って。間違ったことを言い触らすものね、とんだ迷惑だわ、ああ、情ないこと！　ホラステスさんですって？　トゥローイラス様をわたしがお見捨てしたんですって？ホラステスさんって方これっぽっちも知らないわ。トゥローイラス様に向って中傷するなんて悪い人もあるものね。叔父様、明日トゥローイラス様にお会いしたら、世間の女性並みにようく申し上げますわ、そんなこと絶対にございませんって。快くお聞き下さるかどうか分らないけれど。」

八一〇

こう言ってクリセイデは大きな溜息をつき、更に言葉をつづけました、

「[22]ああ、この世の幸福ってものの中には苦しいことが沢山まじってるんだわ、だから学者たちも偽りの幸福って名で呼ぶんだわ。空虚な繁栄

なんてものは元来苦しみに充ち満ちたものなんだわ、たしかに。だって、喜びってものはあれもこれも一度にどっと来るものでもないんだし、この世で絶えず味わえるものでもないんだもの。八二〇ああ、人間の喜びなんてものは頼みにならないもので、はかない幸福に過ぎないんだわ。誰が喜ぶにしても、それがどんな喜びであるにしても、その場合、喜びってものが本来移ろい易いものだってことを知ってる人と知らない人とがあるんだわ。だから喜びってものには二つの場合がある筈だわ。知らない場合、その人は自分が本当の喜びと幸福を持ってるんだって言えるかしら、だって、その人は無智の暗黒の中に絶えず居ることになるんだもの。この世の事柄について喜びなんてものはみんな必然的に移ろい易いものなんだけれど、喜びってものがはかないものだってことを知ってる場合、そのことを考える度毎にその人は喜八三〇びを失うことが恐しくて完全な幸福の中に居られない筈だわ。幸福を失いはしないかって、もしその人が少しでも心配するとすれば、喜びなんてものは全くつまらないものだって風に思えるに違いないわ。だからこの問題についてはこう結論したいと思うわ、つまりこう言えるんじゃないかしら、それは、全くのところ、本当の幸福なんてものはこの世に存在しないんじゃないだろうかってことだわ。それにしても、ああ、毒蛇のような嫉妬よ、猜疑する愚かさよ、トゥローイラス様に対して知りながら罪を犯したことはこれまでにないわたし、そのわたしをどうしてお前はトゥローイラス様にお疑わせしたの?」

「だって、こういうことになったんだもの」とパンダラスが言いますと、クリセイデは尋ねました。

「ねえ、叔父様、誰がそんなことをあの方に言ったのでしょう?ああ、どうしてあの方がこんなにお疑いになるんでしょう?」

注　解

巻の三

(1) 巻の三の序詞は主としてボッカッチョの「フィーロストゥラートー」(Filostrato) に基き、ヴィーナスへの祈りの言葉の体裁になっている。全体は、神々を占星術の立場から見る中世の慣習の顕著な一例をなしているのであって、金星であり恋の神であるヴィーナスは、第三天界 (The third heaven or sphere) に鎮座するものと考えられている。ここに於ては、「愛」は性的な意味を含むと同時に、宇宙を統合する宇宙愛 (Cosmic love) としての意味を有しているのであって、ボッカッチョにおいて既にそうであるように、キリスト教的な「神の愛」の概念が含まれていると考えられる。

(2) 「天国で地獄で……恋を知らぬ者は木の端だ、生きては行かれないのだ。」この個所についてはこの巻の第一七四四―七一行に見えるトゥローイラスの歌、及び、「騎士の話」の第二九八八行以下参照。

ジェフリ・チョーサー作「トゥローイラスとクリセイデ」(その五)

(3) 原文の vapour をこのように訳してみた。この語は It. vapor にあたり、恐らくダンテの浄罪界第十一歌の第六行目から採ったのであろう。竹友氏はこれを「霊気」と訳していられる。この場合 vapore は早くから the divine Love の意に解せられて来たのであるが、現在では Wisdom の意に解せられているようである。ラテン俗語訳「智恵の書」七の二五、「如何となれば〔智恵は〕神の力の気息なり」（"Vapore est enim virtutis Dei."）参照。

(4) ジョーヴは多数の女神のみならず、人間の女とも関係したものと伝えられている。

(5) ヴィーナスがマーズを従順ならしめたことは、「マーズの歎き」（The Complaint of Mars）の第三六―四二行にも歌われている。

(6) 「輝ける女神よ、……君に仕えるひとびとの文人なるわたしに教え給え」これは、しばしば聖母メリーに向ってなされる祈りの表現の echo であろう。「尼院長の話」（The Prioress's Tale）の序詞の第四七八行以下、及び、ダンテの天堂界第三十三歌第一六行など参照。

(7) 叙事詩の女神カライピオの名を挙げたのは、ダンテの浄罪界第一歌第七―九行乃至ローマの詩人スターティウス（Statius）の「テーバイス」（Thebais）四の三四以下の影響であろう。

(8) 「町の鐘が残らず、綱を引く人もいないのに鳴りひびく…。」
異状な喜ばしい出来事を言い表わす場合にこのような表現を用いることは、バラッドやロマンスに沢山見られる。

(9) 前掲巻の一、注(11)参照。

(10) 「この物語の原作者」としてチョーサーは Lollius なる人物を念頭に置いていたのであろう。同じことは第五七五行についても言える。巻の一の注(13)参照。

(11) トゥローイラスとクリセイデを一つの所で会わしめるというようなことは、ボッカッチョの「フィローストゥラートー」の該当部分の記述とは非常に異っているので、この一件についてチョーサーはボッカッチョのフィロコーロ（Filocolo）から暗示を得たのであろうという説も行われている。

(12) 前掲注(10)参照。

(13) Wada という名前は英文学では古代詩 Widsith にはじめて見え、それ以来中世文学に散見するのであるが、古代の英雄（または海獣）としてこの名前に言及するのみであって、この人物に関する詳しい物語を再建することはできない。チョーサーはこの個所以外では「貿易商人の話」（Merchant's Tale）の第一四二四行においてこの名前に言及している。この名前の見える最も詳しい記述は、スカンディナヴィヤの Thidrekssaga であって、ここに於ては、Wada は King Vilkinus と sea-woman との間に生れた giant として扱われている。

(14) 中世の占星術では、土星、火星が悪い相にある時、これらの星は人の運命に悪い影響を与えるものと考えられたが、その不幸の例としては、「騎士の話」（Knight's Tale）の第一九九五行以下、第二四五六行以下など参照。

(15) ヴィーナス（金星）は太陽に近づき過ぎると焼かれてその力が弱まるものと考えられた。Astrolabe, ii, § 4 参照。

(16) ヴィーナスに愛せられた美少年アドーニスは狩猟中に野猪に殺され、その流血からアネモネの花が咲き出た。ヴィーナスはアドーニスの死をいたく悲しんだが、アドーニスは毎年六ケ月だけ下界から地上に出て、ヴィーナスと一緒に暮らすことを許された。Ovid : Metamorphoses, x, 715 参照。

(17) フェニキヤの王アジーナ（Agenor）の娘。ジュース（Zeus）はその美しさに魅せられ、牡牛の姿に身を変えて、浜辺で遊んでいるユーロープに近づき、背中に乗せたまま連れ去ってしまう。「善女物語」（The Legend of Good Women）の第一一三行及び Ovid : Metamorphoses, ii, 833 ff. 参照。

(18) Cipris というのは goddess of Cyprus の意で、ヴィーナスのこと。

(19) River-god ピニーアス（Peneus）の娘。その美しさに魅せられたアポロ（＝フィーバス）に追われて、まさに捕えられようとしたとき、神に祈って月桂樹に姿を変えてしまった。「騎士の話」（Knight's Tale）の一の第二三八三行以下及び Ovid : Metamorphoses, i, 452 ff. 参照。

(20) ハーシーはアッティカの王シークロップス（Cecrops）の娘で、マーキュリーに愛せられた。その姉アグラウロース（Aglauros）はミネルヴァ（＝パラス）の命に背いたため、その罰としてミネルヴァの神力によって妹ハーシーに対して嫉妬を覚えるようになり、ハーシーに対するマーキュリの求愛を妨げたため、マーキュリーの神力によって石に変えられてしまう。Ovid : Metamorphoses, ii, 708-832 参照。チョーサーのこの個所の行文は上述のいきさつを表わすに不充分なように思われる。

(21) 「運命の女神たち」とは言うまでもなくクローソー（Clotho）、ラケシス（Lachesis）、アトゥロポス（Atropos）の三女神のこと。巻の四の注(25)参照。なお、運命に関連して、生れてはじめて着る衣服に言及する表現は、「騎士の話」（Knight's Tale）の第一五六六行、「善女物語」（The Legend of Good Womon）の第二六二九行にも見える。

(22) これ以下のクリセイデの幸福についての言葉に関しては、Boethius, ii, Pr. 4 参照。

（非常勤講師）